

南方（南洋諸島・他）

一将功ならずして

万卒枯れず

—サンゴ礁・死守の話—

島根県 藤原善則

私は、大正十（一九二一）年十月三日生まれます。祖父と両親、私は長男で弟妹七人で、計十一人家族でした。我が家の先祖（七代）が、出雲松江藩松平の殿様の温情によって、下級武士の弟子に、少しでも豊かな生活をさせるために、（旧村名・八川村）の荒廃の土地を開墾せよと与えられ、そこに住居しました。そして開墾した田地一丁三反歩、山林五十町歩を代々受

け継ぎ、家畜も牛が数頭いて、分家（新宅）も四軒と
なつたのです。

昭和十一（一九二二）年三月、八川村尋常高等小学校高等科卒業、在学八年の間に満州事変、第一次上海事変、二・二六事件等あり、子供心にも大変物騒な世の中になつたなと思うようになった。昭和八年頃ではなかつたか荒木貞夫陸軍大将の提案により、主として勤労少年を対象とした青年学校を創設し、徴兵検査の年までの五年間、主として、軍事教練を目的とした町、村立青年学校を開校する事となつた。私は高等科を卒業と同時に産業組合（現在の農協）にも勤務することになった。そして組合の許可もあつて八川村立青年学校本科第一年に入學した。

場所は小学校の校庭、雨天の場合は学校の空室を利用して週二日位、時には夜間教練もあった。指導員は退役軍人の伍長勤務上等兵が任命された。翌年本科二年生に進級した七月、盧溝橋事件ロコウキョウが発端で支那事変となり、引き続き第二次上海事変が再発し、遂に事変は日中全面戦争となった。同時に関東軍そして内地の、各連隊から現役兵が統々と派遣され、八月には予備役軍人の大動員があり、本校の指導員も全員召集され戦地に派遣された。

昭和十四年には青年学校も半ば義務制となり、特別な者を除き強制的に入学させられた。そして各町村に専用校舎が建てられ教育も軍隊の予備校的な存在となった。

そして一方、十四年九月、第二次世界大戦が勃発した。私は昭和十六年四月、本科五年生に進級し、徴兵検査を受ける年となった。

昭和十六年五月十日、三成小学校講堂に於いて、仁多郡十ヶ町村全域の該当者、約三百人が集まり合同で

挙行されました。松江連隊から、加村大佐が徴兵執行官として来られ、軍医将校・衛生下士官及び衛生兵等により行われました。「壮丁体力保健検査簿」に体力・視力その他各項目別に記入され、決定表が執行官の手元に提出され、加村大佐から私が呼び出され、「藤原善則、弱視の為第二乙種合格」で即復唱して終了でした。

早いもので八月初めには、甲種合格者に対しては現役兵として入隊通知がきた。また私達第二乙種は第一補充兵に繰り上げ通知がきた。すでに第一乙種は現役入隊となっていた。大東亜戦争勃発により、第二は第一に第三は第二にとそれぞれ繰り上げになった。

同級生達の入隊は、早くも昭和十六年十二月一日の現役入隊者八人で始まった。彼らは三十日の朝、同級生の先陣を切って盛大な見送りを受けて、浜田西部第三部隊へ入隊した。

第二陣の現役入隊三人は十二月八日であった。この朝ラジオの臨時ニュースは米英との開戦、真珠湾攻撃

で大戦果をあげたとの放送があった。明けて昭和十七年一月六日（入隊十日）に五人の召集があり、そのうち二人は広島部隊、三人は松江西部六十四部隊へと十日に入隊した。この入隊者は開戦当時、松江の吉沢部隊がパターン半島の攻防の激戦で勝利はしたものの部隊の八〇%の犠牲者が出たための補充要員で、三月十日、第一期の検閲が終わると直ちに夏部隊補充要員として派遣された。

私の召集は三月十九日、召集令状を役場の吏員の方から届けられた。

「臨時召集令状 部隊名日時

松江西部六十四部隊 昭和十七年三月二十五日午

前八時ニ同部隊ニ入隊スベシ 松江連隊区司令部」

とあり、その他入隊にあたっての注意事項が記載してあった。吏員さんの話では「八川村で四人の召集があり、内二人は組合職員の方です。またいづれ村主催の入隊者の祈願行事がありますが後日連絡があります」と言っていて帰られた。出発まで四日間、その間組合の事

務の引き継ぎ、祈願祭、各種の送別会や挨拶回りで、四日間があつと言う間に過ぎた。出発の日の早朝、家中が入隊の祝膳につく。これが家族との最後の会食となるかもしれない。祖母や父は今更言う事もなく、ただ体に気を付けて頑張れと言ひ、母は無言で一筋の涙を流していた。出発時刻も近づき見送りの人達と共に駅に行く。駅にはすでに隣村や先にきている入隊者の見送りの人でごった返していた。

無事松江駅に着いた。駅前には入隊者のための宿舎案内所が六カ所あり、下士官の人がいろいろ説明して宿舎先の証明書を渡され、同宿舎の人達と共に宿舎に着いた。

そこには先着の入隊者と付添いの人達がたくさんおられ、一まず落ち着く。米をはじめ、すべての物資が統制されていたが、入隊者という事で食事も十分で酒も二本ずつついた。朝食は入隊者のみお頭付きの肴と赤い蒲鉾、赤飯の祝膳が出た。六時半に一同出発し連隊に向かう。

営門前に到着すると既に黒山の人であった。八時に

なると入隊者は奉公袋と着替え等定められた物を入れた風呂敷包を持って、第三履練兵場に集合、十人ずつ下士官に引率され第一履練兵場に移動し、そこで軍医から簡単な身体検査を受け、合格した者から中隊の下士官に引率され各中隊に行く。私は第一中隊第四班ということであった。

班内に入ると、専任の初年兵係である松原上等兵（後兵長）から藤原の場所はここだと教えられ、寝台の向こうの整頓箱に藤原善則と書いた札が貼ってあった。そして寝台の上に上装の軍服、正帽、下着（襦袢、腰下）軍足、そして軍靴、上履等が揃えてあった。上等兵から早速私服を軍服に着替え、終わった者から舎前の営庭に集合するよう指示があった。五人位集まったところで上等兵の引率で面会所前の付き添い人のいるところまで行き、各自が私物を渡し、簡単な別れの挨拶をする。班内では古兵達が昼食の準備の最中であつた。

食事中、古兵達からいろいろな事を聞かれたり、こちらから話しかけたりして、和やかに食事を終わる。

午後の三時頃に入隊者（二十二名）全員が揃ったところで、上等兵から改めて各自の私物や支給品を整理整頓するよう指示があつた。

八時の点呼三十分前になり点呼準備をする。班内の掃除や整頓をする。各自が寝台前に整列、専任上等兵が人員を確認し、やがて班長と班付の班長二人がこられ、専任上等兵が報告する間も無く、点呼ラッパが鳴り渡る。

第一期の検閲終了後、人事係から呼び出されて、中隊長室へ行き、中隊長から直接「藤原、下士官候補生を受験せよ」だった。私は長男で、軍人生活を長くする気持が無い上に弟や妹が多くいるので「お言葉は有難く身に余る光栄ですが御辞退申し上げます」と言うると、「残念だがそうか」、だった。それから旬日を経ず同期の戦友は外地へと出征しました。私は原隊に残留で、次期入隊者の教育係助手を務めよと命ぜられました。（教育係将校・同じく下士官と教育係上等兵・その下で親身になって入隊者の世話をするのが教育係

助手です。

私の過去、青年学校の成績や入隊後一期の諸動作等にて教育助手にされたのでしよう。これから引き続き、昭和十七年十月まで六期の兵隊教育に携わりました。同期の中には特業と言って縫工・靴工等が現隊に残留していました。

昭和十七年春頃、満州より満期で帰って来た兵隊が居ましたが、彼らは気が荒く、誰彼かまわず暴力を振るい、私的制裁を行い「興安嶺嵐を見せたるか」と怒鳴ってた。思えば哀れな先輩達だった。なお、世評では松江連隊区出身軍人は、威厳に欠けるが温和で協同性が有り、他府県の部隊軍人とも真面目に付き会う事ができた。

昭和十八年十二月五日、出勤命令で東部第一二五〇一部隊編入となり、松江の屯営を出発しました。列車にて門司に着き乗船。「長野丸」七〇〇〇トンの御用船でした。

自分達の他に四国松山連隊、広島県の福山連隊を加

えた三個連隊の兵員で船は満杯でした。海軍の護衛艦は敷設艦が二隻前後にいて警戒してくれていた。豊後水道から外洋に出て南下かと思つたら、敵潜水艦が出没しているとの情報で東方の伊豆半島沖を経て、伊豆七島の父島・母島、小笠原諸島沿いに船は南下。潜水艦の攻撃を受けた時の諸注意事項を申し渡され、なんだか今にも攻撃を受けて沈没するのではないかと、少し心配だった。

途中より護衛艦は無く、単船「長野丸」から見渡す限りの大海原でした。水平線が丸く見えて、本当に地球はまると感じた。

トラック島に着岸しました。燃料（油）と飲料水を積み込んで再び出航しました。当時、軍首脳部は、戦局の悪化により、太平洋正面の前衛戦を内南洋のトラック島を中心とするカロリン群島、マーシャル諸島を結ぶ線を本土の絶対防衛線（絶対国防圏）としていた。そしてこの防衛線を強化するため、新たに部隊を編成することとなった。松江部隊は十二月五日、「作

戦命令甲「卜令」があり、東部第一二五〇一部隊に編入、濠北反撃作戦が企画され、連合艦隊の根拠地であるトラック、サイパン、グアムの防衛のため、前記カロリン群島、マーシャル諸島の島嶼の防衛強化がなされた。

南洋諸島守備隊の編成

南海第一支隊 二個連隊 備一―二二二一部隊

マロエラップ、マーシャル

南海第二支隊 三個連隊 備 四二七二部隊

クサイ、マーシャル

南海第三支隊 三個連隊 ボナベ、カロリン群島

広島西部第二、浜田第三海軍陸戦隊

南海第四支隊 一個連隊 備一―二五〇一部隊

松江第六十四、久留米戦車中隊

工兵中隊、海軍陸戦隊、モートルレック島

南海第五支隊 二個連隊 備一―二五〇三部隊

福山第六十三、海軍陸戦隊、

南海第五支隊 二個連隊 備一―二五〇三部隊

松山西部第六十二、バラオより

ホーランジア

なお、松江西部第六十四部隊の留守担当は、千葉の柏第一二五〇一部隊となる。改めて十八年軍令で南海第四支隊に改編、十二月五日、完結の命が出た。

編成は次の通りであった。

支隊長	飛田大佐	第一中隊長	藤原中尉
副官	杉村中尉	第二中隊長	田中中尉
兵器	田原中尉	第三中隊長	黒川中尉
主計	田村少尉	機関銃隊長	神原大尉
軍医	中曾根中尉	歩兵砲隊長	本田大尉
軍医	久保田少尉	戦車隊長	堤 大尉
軍医	田村少尉	工兵隊長	森川中尉
		砲兵隊長	古賀少尉

右の他にも多くの兵力があったと思う。トラック島は海軍基地で、まるでお城のような戦艦をはじめ多くの艦艇がひしめきあっていた。

昭和十九年一月十八日、モートルレック諸島のサトワシ島に上陸しました。南洋派遣（柏）第一二五〇一部

隊で、「いろは」の「ろ」部隊で、私は指揮班に在籍しました。サトワン島はモートロック諸島で最大の島の珊瑚礁で出来ていて、三日月形をしている。長さは約三〇〇メートル、最大幅五〇〇メートル、標高五〇メートル位の平坦な島で、中央部に飛行場があり、海軍の諸施設が完備していた。飛行場の側に全島が見渡せる望楼がありました。原住民は約二千人、軍人・軍属が千三百人で、陸軍の設備も整っていた。

衣食住の「衣」は暑い国ですから襦一本でよく、「食」は約一カ年の分の備蓄があり、「住」は「衣」と同様です。しかし、いざ決戦となると敵襲に対して如何に防ぐかという防御対策あるのみでした。このため第一陣は哨壺陣地を構築、これを二重三重に各区画を決定し、すぐ襦一本になって全員で取り掛かりました。またこれに続いて各隊独特の住居（退避壕）を造りましたが、艦砲射撃や飛行機からの重量爆弾に対処するにはかなり堅固な壕でないに対応できず、種々の工夫を凝らして構築しました。また各隊は地下通路で連絡できるように広く長く、そしてジグザグに掘り進

みました。もちろん、この作業には軍属（陸軍、海軍共に）の方々が大きな力となりました。ただ食料の備蓄用の壕を作るべきだったのですが、その時間がなく、敵の進攻を迎えることとなったのです。

昭和十九年二月、マーシャル群島、ソロモン群島、ネルバート諸島のうち、第一番にガダルカナルが玉砕し、引続き前記の諸島が逐次陥落、玉砕しました。今日友軍が倒れ、明日はわが軍だと、毎日が決戦前夜の心構えだった。

そして忘れえない日がきた。昭和十九年五月一日、早朝から敵の艦載機（偵察機）が飛来、超低空で縦横に飛び回った。間髪を入れず戦爆両用機が数十機飛来、爆弾を投下し、身軽になった敵機は波状攻撃で機関砲や機関銃を乱射した。友軍も少数の高射機関銃で応戦するも、衆寡敵せず、撃破された。敵機退散で、やれやれと安堵した途端、全身を押しつぶすような重圧を感じた。物凄いい爆発音と爆風です。

物見の斥候が飛び込んできて「海面いっぱいアメ

リカ戦艦が列をなして本島に向かって艦砲射撃を始めました」という。私も壕の陣地から顔を出してみると、敵艦十七、八隻が砲列を揃えて一斉砲撃中です。

我が軍は全員退避で地下壕に息を潜めて、ジーンと待つのみです。敵弾は雨霰のように飛び来る。

この時、サトワン島守備隊長である飛田正武大佐からの言葉が全員に伝えられた。「爆撃や艦砲射撃の後に敵は上陸してくる。それまでは全員ジーンと耐え忍んでくれ。その後に敵が上陸してきて肉弾戦になる。その時は、俺に皆さんの命を下さい」と、玉砕だった。

長い長い沈黙が約五時間続いた。ピタッと砲撃は止む。敵が上陸してくる。各人蛸壺陣地に布陣し、迎撃準備完了。伝令が走る「敵影なし、爆撃、艦砲射撃の被害を調査報告せよ」と。退避地下壕のお陰で人的損害は軽微だった。私の中隊の兵一人が爆弾の破片で腹が破れ、内蔵が飛び出していた。軍医は余命幾許もなし「遺言を聞いてやれ、水は絶対飲まずな」だった。このような重傷者が水を飲んだら即絶命ということは

知っていたが「一口水を下さい」と懇願され、助からぬ命なら、本人の望みを叶えてやろうと水筒の水を与えてやった。一口飲み「ああ旨かった」で絶命した。

彼は広島県の僧籍の軍人だった。戦後、その遺族を尋ねたが不明でした。その彼の最期の一言「お母さん」を私は伝える義務があると思ったが、不明で致し方なし。けれども自分としては、軍医の言葉に反して水を与えたが、彼がにっこり笑っての「有難う」と「お母さん」の声は、五十年経過した現在も脳裏に残っています。

敵の大艦隊が引き揚げた。我が軍の損害、死傷者多数。しかし地上施設の兵舎はもちろん、一番貴重な食糧格納庫等は跡形もなく完膚なきまで破壊され焼失した。制空権・制海権は敵の手中にあり、以後の物資補給は絶望である。自活して飢餓との戦いになった。

「ろ」隊においても農耕班、漁労班に分け、一部は士気を鼓舞する意味で慰労班を作った。傷病者以外は全員魚捕りに行った。農地を耕して野菜作りに励ん

だ。私は手先が器用だといわれて囲碁・将棋・麻雀・トランプ・花札等を二、三人で作った。また原住民は、財産である椰子の木が全部砲撃や爆撃で倒されたため、老人や女は涙ながらに泣いていた。五〇本もの椰子の木を持っていたら金持ちだという。この財産を失い、元のごとく生育するには三、四年は掛るのです。

軍隊にしても、この孤島に救いもなく、食も乏しい現状で、しかも敵襲の有り無しも不明、これが戦争なのか、不可解だと自問自答した。

昭和十八年十二月に門司の港を船出してモートロック諸島に着任して以来二年八カ月余、思い出ししても昭和十九年春から、アメリカの飛行機に悩まされた。爆撃機のボーイングは別として、グラマン、カーチス、ベル、ロッキード等の戦闘機・爆撃機・偵察機には、毎日定期・定時刻に攻撃されながら、よく辛抱したものである。

昭和二十年八月十六日早朝に、顔見知りの原住民がきて「兵隊さん、日本はアメリカに負けた」と言っ

「昨夜米国潜水艦から水兵さんがきて、チョコレートや煙草をくれた」と言いながら、煙草をすっている。驚いていたら「全員集合！ 整列」だった。飛田大佐が「昨日正午、天皇陛下におかせられましたは、日本全国民に対し終戦します」との玉音放送があった、と大佐は手放しで涙を流しておられた。飛田正武大佐は申された。「世に『一将功なりて万骨枯る』とは何事ぞ。私は皆さんに申し上げます『一将功ならずして万卒死なせず』です」と、本当に武士道の精神だと感じました。

私は昔より言葉にある「人生は禍福あきと糾あえる縄の如し」です。自分は幸福だ。

昭和二十年十月十八日、日本海軍の敷設艦「巨齋」が火器一切取り除いた丸裸で迎えのため港に着きました。「乗船せよ」との命令にて、日本に向かって船は北進しました。自分たちは無傷で復員するが、多くの戦死者に対して（私は運命論者ではないが）申し訳無く思う。生き残った自分たちは、罪悪感に悩まされることのない人生を送り、国のために平和日本に力を尽

くそうと、甲板の上で、南海の紺碧の海に向かって誓った。

日一日と寒くなってきた。昭和二十年十月二十九日、横須賀に上陸、二重砲連隊の跡で復員手続完了。同十一月三日、召集解除、翌四日夜、自宅に帰還した。

早速翌朝から近隣知己、友人にお礼の挨拶回りをした。出征前の農産業協同組合に復職して、すべて出征前のごとくになりました。近隣には、たくさんの戦死者の家があり、無事復員を大きな声で喜べない状況でした。戦死者に思いを馳せ、言葉を慎みました。その人の分もと復興には力を入れて働きました。

満州事変から

玉砕地マリアナの戦いまで

愛知県 川 嶋 正 巳

私は大正三（一九一四）年四月一日生まれ、昭和九

（一九三四）年一月十八日、豊橋の歩兵第十八連隊第一機関銃中隊に入りまして、昭和九年四月より、同十一年五月まで主として北部満州において満州事変に参加し、昭和十二年八月、歩兵第十八連隊第一大隊本部勤務となりました。

そして支那事変の後半、歩兵第十八連隊だけ第三師団から抜けるということになりました。

と申しますのは、第三師団は歩兵第十八連隊、静岡の歩兵第三十四連隊と第二十九旅団、名古屋の歩兵第六連隊と岐阜の歩兵第六十八連隊と第五旅団という四つの連隊と二つの旅団で編成されていましたが、第三師団から歩兵第十八連隊だけ手放した訳です。

この歩兵第十八連隊は昭和十七年七ころ、当時静岡の第二十九旅団の旅団長が歩兵団長となって、満州の常陽で編成された歩兵団に入った訳です。

こんなことで満州へ行きました。当時は平時編成で訓練を受けました。その前に、軍隊の中から士官学校へゆくという制度があり、命令を受けて試験を受け士官学校に一年ほどいて帰隊しましたが、さぼっており